

### 産地形成期（明治末～大正）

増永工場の眼鏡製作技術は、地縁のある河和田村（現在の鯖江市河和田町）へと広がり、鯖江産地が形成されていく。大正3年に勃発した第一次世界大戦の軍需景気により、眼鏡産業は急成長する。大正8年には、24工場で年産4千ダース、13万円を出荷するようになった。この後、産地は不景気や米金旋風など苦境を乗り越え発展を続ける。



### 初期（誕生～明治末頃）

雪国の人々の気質に合っていたのか、眼鏡作りの技術習得は早く、真鍮製の眼鏡枠から金・銀・赤銅製へと急速に技術が進歩していった。



五左工門は、「帳場制」と呼ばれる「親方」を中心とした独立採算制度を採らせ、製品の独自性と技術の進歩を促した。これが福井産地を築く大きな要因になったことは間違いない。

### 眼鏡産地の誕生

福井の眼鏡産業は、明治38年（1905年）足羽郡麻生津村生野（現在の福井市生野町）に始まる。



増永五左工門氏

この地の庄屋の家に生まれた増永五左工門は、雪国の農村の貧しい生活を憂い、弟幸八らと眼鏡枠作りを思い立つ。五左工門は大阪より眼鏡職人を招き、村の若者たち4人を集めて眼鏡作りの技術の習得を始める。この日が明治38年6月1日、「眼鏡産地福井」が産声を上げた日となった。

### 冬の時代（昭和初期～第二次世界大戦）

昭和に入り、世界は経済恐慌に見舞われ、産地形態を整え始めた福井眼鏡業界も、終戦まで続く「冬の時代」を迎える。第二次世界大戦に突入すると、軍事統制下、工場の多くは軍需工場に切り替えられた。また、眼鏡製造を続けられた工場も技術者不足と材料不足に泣かされた。



# 眼鏡産地100年の歩み

資料提供／  
社団法人 福井県眼鏡協会

### 終戦～1960年頃

終戦を迎えると休業状態になっていた工場も徐々に生産を再開し始める。極端な物不足の中、東京・大阪の業者が買い付けに殺到し、作れば売れる時代になった。鯖江市の旧三十六連隊の広大な跡地は、民間に払い下げられ神明地区は眼鏡の町に変貌していく。その後の好景気に支えられ、福井産地の量産体制はほぼでき上がる。また、当時のドイツ製品を見習い、製造技術や品質も格段に進歩していく。



### 1960年～1980年頃

東京オリンピック（昭和39年）を前後して、サングラスが大流行する。この時、産地生産の7割近くがサングラスとなった。昭和42年頃から、生産過剰がたたって産地の状況も一変し、倒産の嵐が吹き荒れる。「めがねの火祭り」と称して在庫の焼却処分が行われた。



昭和43年には、福井県眼鏡協会が発足。国内外に向けて産地PRが積極的に行われた。昭和45年「第1回日本めがね展」が開催され、全国各地の卸商や海外バイヤーが数多く集まった。



### 1980年代～現在

昭和56年頃から眼鏡枠の貿易収支は、輸出超過に転じ、福井産地は世界三大生産地の一つと数えられるようになった。技術水準においても、チタンフレームの技術開発などにより、世界のトップレベルとなった。近年はデザイン分野においても欧州に追いつき、追い越したと言われるまでに成長している。生誕から100年、福井産地は国内生産の95%以上を生産する集積地へと発展してきました。近年、中国製品の追い上げなど産地を取り巻く環境には厳しいものがあります。しかし、私たちはこの100周年を機に、増永五左工門の志を引き継ぎ、今後の100年に向かって進み続けます。

